

巻頭言 「地域学術大会を Next Stage へ」

公益社団法人 日本放射線技術学会
東北支部支部長 坂本 博

東北支部雑誌 29 号発刊にあたり、第 9 回東北放射線医療技術学術大会(本年度から Tohoku Congress for Radiological Technology2019 と英語表記させていただきました)に参加いただいた全ての方々に御礼を申し上げます。第 9 回大会は、大会ホームページの作成、演題募集、演題審査、抄録集の電子化、発表データの登録、当日運営、会計処理まで様々な点で新しい取り組みをするとともに、その取り組みを次回以降の大会に繋げることを目的としました。大会準備に先立ち、本取り組みを承諾いただいた、日本診療放射線技師会(JART)東北地域、船水地域理事はじめ、TCRT 役員の皆様、各県診療放射線技師会長の皆様、日本放射線技術学会(JSRT)東北支部役員の皆様、実働に取り組んだ TCRT2019、斎実行委員長はじめ実行委員の皆様にご心より感謝を申し上げます。また、次回 TCRT2020 福島大会に滞りなく引き継げるように進めさせていただきます。TCRT2020 新里大会長、村上実行委員長、よろしく申し上げます。

さて、JART 各地域と JSRT 支部がコラボレーションした学術大会を共催しているのは東北以外にも 3 つの地域があります。最も先行して開催していたのが、中国四国支部で 2019 年度に第 15 回大会(高知)が行われました。九州支部が第 14 回大会(熊本)、中部支部が第 12 回大会(浜松)と続きます。また、学術大会ではありませんが、JSRT 東京支部は東京都診療放射線技師会と単独の共催で 18 回の合同学術講演会を開催しています。地方に行けば行くほど、その広域性は増していき、両会員のために学術大会を効率的に開催する考え方が生まれるのでしょう。それは、限られた予算の中で両会員のメリットになっているのだと理解しています。共催を先行した地域は JART との地域区分が同一であり、比較的共催が行い易かった面もあります。一方で東北地域は、JART、JSRT の異なる区分割りで、TCRT がその壁を乗り越えて大会運営ができていないことは、大きな意味があるのではないのでしょうか。JSRT 東北支部の学術大会としてみれば 57 回という歴史のあった大会を両会共催の学術大会へと再生された先人の諸先輩方の情熱と志に感服します。

地方支部の学術大会は、これまで本部主催大会への前ステップとして学術発表を行ったり、総会学術大会の先進的な講演企画を焼き直して企画したりすることが多くありました。しかし、これからは、学会事業の多くが地域発信型になることを想定しています。地域も ICT などの発達で環境は変化するでしょう。そして、TCRT が地域発信の学術大会として進化するには、総会学術大会ではできないこと、または先に企画を実装することも必要になるのかもしれませんが。顔の知れた間柄だからこそ深く議論ができるのかもしれませんが。JSRT の第 46 回秋季学術大会(仙台)の時のように震災・災害をテーマに地域ならではの企画で差別化ができるのかもしれませんが。東北発信の学術大会の Next Stage を会員皆さんとともに創造したいと考えています。